

異能の将校・石原莞爾の世界最終戦争論と「一夕会」

関口宏、保阪正康のもう一度！ 近現代史(2)

関口 宏

, 保阪 正康

プロフィール

BS-TBSの人気番組の書籍化第二弾！ 新興国・日本が経済力と軍事力に自信を深め、欧米列強に伍する新たな一等国として成り上がろうとした、野望の時代、大正～昭和11年初頭までを描く書籍、『関口宏・保阪正康のもう一度！ 近現代史 戦争の時代へ』から注目の章をピックアップしてお届けします。

異能の将校・石原莞爾の世界最終戦争論と「一夕会」

昭和4（1929）年5月19日

陸軍の改革派中堅将校が「一夕会」を結成。石原莞爾は日本とアメリカが将来、「最終戦争」を戦うという、独自の構想を説いた。

関口 張作霖爆殺事件のあと、満州の実権を握った張学良は、蒋介石率いる国民党の支配下に入り、中国が統一されます。

昭和4年5月19日、永田鉄山大佐、板垣征四郎大佐、東条英機大佐、石原莞爾中佐ら陸軍の改革派中堅将校が集まり、一夕会を結成します。その下の岡村寧次、土肥原賢二、山下奉文らも参加している。加えて、張作霖爆殺事件首謀者の河本大作まで名前を連ねています。



保阪 明治の建軍以来、陸海軍は長州、薩摩の藩閥によって動いてきました。山縣有朋などがその主導者です。これに対して陸軍の改革派は、第一次世界大戦のあと、多くがドイツ留学を経験しています。もともと日本の軍隊はドイツ、プロシアを模倣して作ってきたものですから、あれだけの軍事力を持っていたドイツが第一次大戦でなぜ負けたのか、ベルリンでそういう研究をするんです。

たとえばドイツ軍が前線で懸命に戦っているのに、ドイツ国民が軍を支援せず、後方で革命だ、反政府運動だと言って戦争に協力しなかったことに問題があったとする。東条英機などはこの考え方です。そこから、国を総力戦の体制に変えていかなければいけない、前線で戦う軍を国全体で支える体制に変えていかなければいけないという発想につながっていく。

もうひとつ、薩摩・長州などの藩閥出身者だけが出世していくことに対する反感もありました。永田鉄山は長野出身ですし、岡村寧次も東京の人です。彼ら改革派将校が東京・渋谷の二葉亭という店に集まって会合を持ったので、「二葉会」とも言われました。

「世界最終戦争論」

関口 その二葉会が発展して一夕会になったんですね。

保阪 彼ら一夕会はまず、人事の刷新を求めます。藩閥中心の人事を廃することを求めたんですね。そして二つ目に、満蒙問題の総合的な解決を求めた。満州を中国と切り離して独立させよと。それを自分たち改革派が中心になってやる、ということですね。だからその意味でも河本大作はよくやったということになるわけです。

三つ目に、陸軍の指導者として、荒木貞夫中将、真崎甚三郎中将、それから林銑十郎中将といった人たちを担ぎ、我々はそれを支えていこうと決する。

関口 なかでも一夕会メンバーの一人の石原莞爾は、この年7月に満蒙問題解決案を示します。「満蒙問題の解決は日本の活きる唯一の途なり」としています。



少し前までは日本は主権線を守ったうえで、利益線をなんとか安定させないと安心できないという考え方でしたが、そこから一気に「活きる唯一の途」になってしまった。

保阪 石原莞爾は満州を利益線と捉える考えとは少し違うんです。

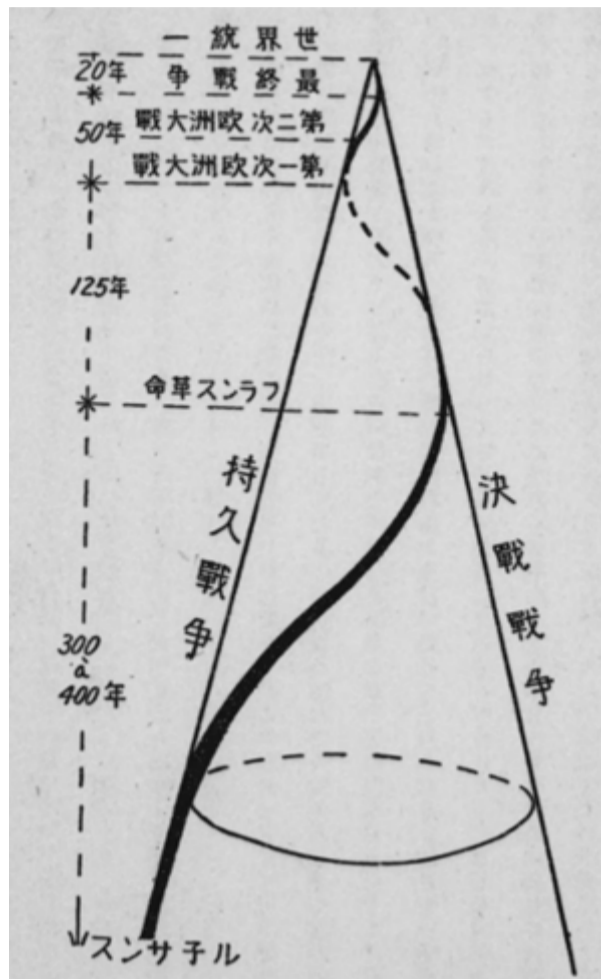
石原はある一つの信念を持っていて、人類は最終的に東洋文明の代表である日本と、西洋文明の代表であるアメリカが戦争をし、その戦いの勝者が決して、その後人類は戦争のない平和な時代をつくるという「世界最終戦争論」です。

関口 石原が提示したこの考えを、軍部は支持したんですね。

より細かく見ていくと、東洋の覇者日本と、西洋の覇者アメリカによる最終戦争は完全な殲滅戦で、一挙に決戦に持っていくようなものになるだろうと予測しています。その開戦時期は、日本が東洋文明の中心的地位に立ち、アメリカが西洋文明の中心に立ち、航空機の無着陸世界一周が可能になるときに起こると。つまり、飛行機中心の戦争を予想しているわけです。

最終戦争に勝ち、東西両文明の統一と恒久平和を実現して人類を救済するのが日本の使命なのである、としています。

保阪 石原は昭和の陸軍では珍しい理論家と言っていいと思います。現に戦後、論文、講話などをまとめた8巻の著作集が出ている。旧軍人で著作集が出ているのは彼だけです。



軍のなかでも石原を尊敬し、私淑する軍人は多かったのですが、東条英機とは考えが合わず、口も利かない関係でした。石原は戦後、東京裁判に証人として出廷した際、検事団に「あなたは東条と思想的対立があったようだが」と問われて、「そんなものはない」と否定しています。なぜなら自分には思想があるが、あいつにはないじゃないか、と。

関連記事「満州某重大事件 張作霖を爆殺した関東軍のどす黒い目的」

中国の文明と日本を融和させ「東洋文明」をつくる

関口 満州について石原は、「歴史的関係等により観察するも満蒙は漢民族よりもむしろ日本民族に属すべきものなり」と言っています。



保阪 満州は漢民族にとってさほど重要な土地ではない一方、日本は満州を開拓し、開発していくべきであると主張しています。そして、世界最終戦争になれば、満州を日本の兵站とし、その資源を使うという。つまり**石原にとって満州事変は、世界最終戦争へ向けた第一段階だったんです。**

関口 満蒙問題の解決は、「日本が同地方を領有することによりてはじめて完全に達せらる」「謀略により機会を作製し軍部主導となり国家を強引すること」と言っている。

保阪 そうですね。ただ石原は満州を中国から切り離し、様々な民族が住む土地にすべきであって、日本はそこで特権的な地位を占めるのではなく、関東軍が支配するなんてことはとんでもないとも主張しています。**東亜連盟という組織をつくり、中国と日本が話し合い、協力しながら文明をつくろうと、一見矛盾したことを言っているんです。**

関口 ただその大元には例の「世界最終戦争論」の考え方があるんでしょうね。

保阪 中国の文明と日本を融和させ、「東洋文明」と称して、それをもって西洋文明と戦おうという思想を持っていたのです。